様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６０６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７２０３４９

研究課題名（和文）現代韓国の労働運動とキリスト教；１９６５－１９７０年を中心に

研究課題名（英文）Korean Labor and Christianity; 1965-1970

研究代表者
斉藤　涼子（Saitoh, Ryoko）

学習院大学・付置研究所・研究員

研究者番号：５０５９９８４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：　韓国では1958年に、労働者に布教するキリスト者グループである「都市産業宣教会」が発足し、1970年代には、労働運動に積極的に参与するキリスト者グループとして変化した。ソウル市永登浦区においては「永登浦産業宣教会」があり、その変化過程は3期に区分することができる。1期は労働者布教のために経営者に接近し、労働者信徒の獲得を目的とした時期、2期は労働組合や経済企画院、生産性本部と接触し、産業問題に取り組み始めた時期、3期は労働者布教が隘路に直面し、地域活動として労働者救済を模索し始めた時期として区分できる。キリスト者は労働現場に関わることで自身の活動目的を変化させていった。

研究成果の概要（英文）：In South Korea ,Urban Industrial Mission –Christian group for evangelizing labor started their work at 1958. In 1970’s, they became activists and tried to help labor movements because they were keeping relationship with labor or labor unions. At Yeongdeungpo , Seoul, UIM began their mission by forming a connection with employer. Then they tried to approach Labor unions, the Economic Planning Board and Korea Productivity Center for solution of industrial problems. However at the end of 1960’s their evangelizing and charity for labor failed. Therefore they had to reconstruct relationship with labor, they were trying to turn their mission into a social movement. Christians of UIM changed their policy by communication with labor.

研究分野：韓国現代史

キーワード：労働運動　韓国　キリスト教

１．研究開始当初の背景

本研究は、1965-1970 年までの 5 年間の韓国を対象に、労働運動に参与したキリスト者の思想と運動を分析することで、キリスト者と労働運動の関係について具体相を明らかにするものである。今まで、韓国の労働運動にキリスト者が参与したことは知られてきたが、本格的な歴史研究は途上にある。

本研究は、この状況にかんがみて、特に「経験の語り」に着目し、当事者らの証言を検討することで、文献資料からでは見えてこない「生きた」歴史に接近し、キリスト者と労働者の関わりを解明しようとした。

(1)キリスト教研究における背景

現代韓国における労働運動とキリスト者の関係に言及した研究蓄積は薄く、キリスト教思想研究でみれば、わずかに「民衆神学」が議論されてきた。この神学思想は、民衆の生きる「現場」(主に工場や貧民居住地区)に参与することで、彼らを非人間的な生活から解放することがキリスト者の使命であるとするものである。民衆神学は 1970 年代後半から本格的な思想展開をし、現在では、これが労働運動に参与したキリスト者に宗教的根拠を与えたと評価されてきた。

(2)労働運動史研究における背景

労働運動史においては、植民地期から現在まで重厚な蓄積がある。当該研究の対象とする時期(1965-1970)は、軽工業に重点が置かれた輸出志向型経済政策期にあたり、農村出身・若年・未婚の多くの女性が韓国経済の担い手としてターゲットとされた時期でもある。しかし、このような重要な特徴をもつ時期でありながら、1960 年代～1970 年代初頭を対象とした労働運動史の本格研究は進んでおらず、労働運動に積極参与したキリスト教会と労働者との具体的な関係についても未解明のままであった。

(3) 研究の動機

以上のように、現代韓国の労働運動にキリスト者が果たした役割は一定の評価がありつつも、これについての歴史学的な検討は途上にある。また、今まで、関連研究においては、ラテンアメリカやフィリピンで労働者・貧民の生活環境に身をおき、住民運動に協働したキリスト者の事例から比較研究が行われてきたが、そこでは、韓国キリスト者の政治志向の特徴や、組織の性格に対する分析が主立っていた。これらをふまえつつ、本研究では、「活動の現場」に接近するべく、発行された壁新聞や活動報告書、関係者への聞き取りなどを積み重ねることで、キリスト者と労働運動の関わりを具体相から追及しようとした。このような小さな史料を詳細に検討することで、従来論じられてきた組織のモデル分析の大きな枠組み研究に対して、実証に即した視角を開くことができると考えたためである。

２．研究の目的

このような背景の下、本研究では、現代韓国の民衆運動研究の一角としての労働運動とキリスト者の関係を考察した。なかでも工場で宗教活動を通じて工場労働者と関係した「都市産業宣教会」にフォーカスし、その活動の具体相を追及することで、キリスト者と労働者がどのように対話(あるいは対立)し、労働運動へと展開していったのかを追究することを目的とした。

「都市産業宣教会」は、各地の労働現場に「○○産業宣教会」(○○は地域名)として、労働者を支援した団体である。特徴としては、統一した中央組織をもたず、地域ごとに地域に即した活動をしていることや、プロテスタント団体でありつつ、カトリックとも協働するなど、超教派的な性格を有することが挙げられる。

従来、この団体については、朝鮮戦争で疲弊した産業社会に「労使協調と産業平和」をもたらし、「反共防衛のための経済成長」を目指すとして、1950 年代から工場で純福音伝道を進めていたこと、そして、劣悪な労働環境に生きる労働者との交流から 1960 年代から次第に労働問題へ意識が向き始め、1970 年代には当局から「アカ」と名指されるほど先鋭化したことが知られていた。

本研究では、この通説に対してより詳細な資料をもってアプローチすることで、この団体の変化過程を追及することを目指した。特に、1965 年からの 5 年間を中心に考察することで、労働問題に対する「萌芽」ともいえる特徴を見出し、1970 年代から先鋭化する運動の基礎がどのように築かれつつあったのかを明らかにしようとした。

また、研究対象時期の工場労働者の多くが、未婚・低学歴・若年という共通項をもった農村出身の女性であったことにも留意し、当時の韓国経済の主軸を担った軽工業に、農村女性が誘引・投入されていった事象や、あるいはキリスト教が労働者という民衆に、どのように受容れられ(あるいは拒絶され)たのかにも注目することで、ジェンダー学や宗教学に通じる学際的な論点も提示することを目指した。

３．研究の方法

本研究では、キリスト者が労働運動に関わった事例として「都市産業宣教会」について、その思想と活動の分析を進めた。「都市産業宣教会」は、各地域に存在するが、より具体的な内容とその結果を確実に追求するために、ソウル市有数の工業地帯である永登浦区に限定し、「永登浦産業宣教会」についての検討をおこなった。

この分析にあたっては、活動プログラム、活動報告書の他、同会と関わった労働者信徒のグループの会紙などを文書史料として使用した。キリスト者側と労働者側の双方の史料を検討することで、偏りに配慮した。また、文書史料の検討に並行して、当事者への聞き取りも実施した。当事者の「生きた歴史」を書き残し、検討することは、本研究の特色であるので、数年度にわたり実施することにした。

よって、本研究における計画と方法は以下の 3 点とした。

Ⅰ.「永登浦産業宣教会」の組織、財政構造、活動内容、思想について文書史料を検討する。

Ⅱ.当事者への聞き取りをおこない、文書史料だけでは接近できない「経験の語り」を採取、検討する。これは文書史料の補完的役割も果たす。

Ⅲ.韓国と日本のキリスト者の交流がこれらにどのような影響を与えたのか、文書史料と聞き取りから検討する。

４．研究成果

(1).研究の主な成果

本研究において得られた主な成果は大きく分けて 2 つある。ひとつは、「永登浦産業宣教会」について、1960 年代全般にわたった概要が明らかになったことであり、もうひとつは、当事者への聞き取りによって、1960 年代を中心とした労働現場の実相が一定程度明らかになったことである。

まず、前者に関しては、本研究は当初、1965-1970 年の 5 年間を対象にして「永登浦産業宣教会」の具体相を明らかにするものであったが、調査を進める過程において、同会が発足した 1958 年にさかのぼって経歴を追う必要が生じたため、検討時期を拡げることにした。そのため、本研究では、1965-1970 年を中心としながら、その前史にも射程を延ばして検討を進めた。

その結果、「永登浦産業宣教会」について、3 つの時期区分が考えられた。1 期は「永登浦産業宣教会」発足時～労働者信徒の小グループ形成時(1958-1964 年)、2 期は「永登浦産業宣教会」が労働組合にアプローチし始めた時期(1965-1966 年頃)、3 期は実際に工場で労働者と関わったキリスト者を中心として「永登浦産業宣教会」の変革を追及し始めた時期(1966-1970 年前後)である。

これについて、「永登浦産業宣教会」の発足時(当時は「永登浦地区産業伝道委員会」と称した。以下、「委員会」)には、「委員会」は自身が属する中央組織である「長老会総会伝道部産業伝道委員会」からの指示によって、設置され、これが各工場への福音伝道運動にあたったことがわかった。よって、開始期には、地域ごとの活動ではなく、中央からの上意下達式に展開していたといえた。また、その活動目的としては、主にクリスチャン経営者に接近し、工場で礼拝を開く許可を得て、労働者布教の道を開くことが重要視されており、この時期においては労働者への接近よりも経営者への接近が優先されていたことがわかった。一方、このような活動を通じて関わった労働者信徒は、小グループを形成し、「委員会」を通じて、礼拝活動や聖書学習を始めたが、小グループは概して所属企業の金銭的後援を得て活動していたため、内容としては労使融和的になっていた。

次に、キリスト者が労働組合に接近し始めた時期については、「委員会」関係者が労働組合幹部と会合をもったこと、経済企画院や生産性本部から講師を呼び、労働者信徒向けに講座を開いたことが特徴として表れた。また、講座においては「労働者の保健・賃金」が主題となることが多く見られ、労働者・経営者双方に、労働者の健康と正当な賃金について講義していたことが確認でき、労働環境の改善に「委員会」が関与しようとしたと見られた。

3 期については、「委員会」が「永登浦産業宣教会」(以下、「宣教会」)と改称した時期であり、この時期には、純福音伝道の「行き詰まり」、すなわち工場における信徒活動が隘路に直面していたことがわかった。これには、企業の非協力や工場労働の過酷さが原因として考えられたが、前者については、工場におけるキリスト教活動を受容する企業がさほど増加せず、受容した工場においても多くのケースにおいて「余暇活動」程度の扱いであったこと、後者については、これに関連して、生産現場では何よりも「労働」が中心にならざるを得ず、輸出志向政策の下で日々過酷になる労働生活に、「余暇活動」であるキリスト教活動が入り込む隙がなくなりつつあったことがあげられる。その一方、「宣教会」では、キリスト教会から離れて行く工場労働者に再度接近する方法が議論され、その過程において、日本のキリスト者グループへの連帯が図られたことが明らかになった。「宣教会」は西陣(京都)でキリスト者グループが設立した「労働センター」に着目し、教団事業を離れた地域活動として労働者を支えることを模索し始めていた。

次に、聞き取りによって明らかになったこととして、1960 年代の労働生活の実態があげられる。本研究では、主に繊維業に従事した 3 名の(元)労働者に聞き取りを実施したが、この聞き取りによって得られた証言のうち、共通した内容は大別して 3 つある。

第 1 に、労働災害・疾病の実態である。繊維業においては、特に小規模工場において、換気の悪い小部屋で繊維くずを吸い込むことによる肺疾病が知られていたが、これに加えて、特に染織業においては、化学薬品を使用するために、目と呼吸器全般が薬品で汚染されたことがわかり、労働疾病は全身におよぶものであった。また、木材工場においては、手指の切断などが主な労働災害としてあげられたが、手指を失うことによって、生活上の支障だけでなく、工場への再就職が不可能

になり、失業におちいったことも証言された。また、これらの労働災害は、法的には権利が保障されていたものの、労働者にはそれが知らされず、多くの場合「泣き寝入り」になった。

第 2 には、1965 年の日韓国交正常化以降、産業界における協力体制が築かれ、多くの繊維業で機械化が進んだが、それが必ずしも労働者の環境を向上させたとは言いがたいということである。まず、ミシン工においては、日当制であったため、ライン化によって「仕事量が増えたが給料が増えない」状況が生まれた。ラインが導入されたことで、一日に生産できるシャツの数が増えたために、結果として「給料が下がる」ことになった。また、導入された機械について、ある証言者は、「1950 年代の日本製の『型落ち』を払い下げられた」といい、機械が古いために、最新の機器を使用している国と国際競争をするためには、長時間労働が必然になったことを話した。これらの証言から、機械化によって、むしろ労働者の過労働が常態化したことが考えられた。

第 3 に、労働現場においては、労働法で定められた年齢よりも若年の子供たちが就業していたケースが多数あったことである。就職の際には、就業可能年齢を確認するために大工場では「身分証」によって年齢を確認したが、零細工場ではそのような仕組みがなく、12、3 歳から就業していたこと、さらに、大工場においても、就職するために、多くは姉の「身分証」を借りるため、実際の就業者は、法で定められたよりも若年であったことが証言された。

これらの証言は、個人の体験によるため、必ずしも当時の全体状況を示しているものではないが、1960 年代の労働史研究が途上にある現在において、文書史料だけでは見えない「歴史」が見えるものとして貴重である。

(2).得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究が明らかにしたことは、①「永登浦産業宣教会」の 1960 年代を通した歴史的な具体相、②1960 年代の労働生活の実態であるといえる。日本・韓国ともに、現在の研究状況においては、1960 年代の労働史は蓄積が薄く、1970 年代以降に苛烈化する権利獲得闘争としての労働運動研究が進んでいる状況である。また、これに関連して、「都市産業宣教会」の活動についても、労働者の闘争を支持した 1970 年代以降の研究が中心的であり、その「前史」としての 1960 年代の実態解明は進んでいない。

このような研究動向からみると、本研究は、1970 年代の労働運動の激化の「導火線」として、どのような労働状況があったのかを、一部ではあるが、明らかにすることができたと考える。また、「都市産業宣教会」についても、1970 年代の労働者志向的な様相を帯びるまでの過程を追求したことによって、「福音伝道目的だったキリスト者が 1970 年代に急激に労働運動に接近した」という単線的な理解をこえて、展開過程の起伏を示すことができたと考える。

(3).今後の展望

以上のように、本研究は一定の成果を見ることができたと考えるが、いくつかの課題も残っている。第 1 に、「永登浦産業宣教会」の活動実態については解明が進んだが、その思想展開については、研究を進めることができなかったことである。1 点確認できたこととして、キリスト者の「成長主義」があげられるが、これは、朝鮮戦争後の社会疲弊を背景にして、「経済成長をすれば、所得も上がり、労働者の生活も向上する」という論理に基づくものであった。この論理は 1960 年代を通じて見られたものであり、そのため、彼らの労働者への寄り添い方は、「生産力を上げるためには労働者の保健と教育が第一である」という慈善的な態度であったことも併せて指摘できるが、より詳細な検討は今後推進するべき課題である。

第 2 に、韓国の「都市産業宣教会」に、日本の「労働者伝道」がどのように関わったのかについては、詳細の追求が進まなかったことがある。日本では、釜ヶ崎を中心に、労働者の生活問題に取り組む「関西労働者伝道」のグループなど、社会問題に関わるキリスト者グループが複数あり、韓国のキリスト者グループと交流を続けている。これは、1978 年に「日韓 UIM(Urban Industrial Mission)協議会」を共同開催したことから継続している試みだが、これについては詳細を追うことが困難であった。日本側の史料の多くが散逸しているため、時系的な把握に時間を要することがいちばんの困難であった。そのため、今後の課題として、引き続き検討していく。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 2 件）

①斉藤涼子「キリスト教会の労働者布教 −長老会の産業伝道から」、朝鮮史研究会関西部会 2015 年 4 月例会、2015 年 4 月 25 日

②斉藤涼子「労働とキリスト教をめぐるジェンダー −韓国永登浦地区の産業伝道から」、同時代史学会定例研究会第 29 回、2012 年 3 月 17 日

６．研究組織

(1)研究代表者

斉藤　涼子（SAITOH RYOKO）
学習院大学・付置研究所・研究員
研究者番号：50599842